

オンラインによる聴解授業における 相互作用の課題と対応

内 山 喜代成

要 旨

本稿では中級日本語学習者を対象としたオンラインによる聴解授業における相互作用の課題と対応について報告する。オンラインでの聴解授業では著作権の観点から、音声を聞く活動を個人で行わなければならない、学習者がどのように聞いているのかを把握することが困難となった。そこで、再話活動を取り入れ、学習者の理解の確認と支援を行うことで、課題の解消につなげた。しかし、同時双方向会議ツールを用いたグループ活動では、学生間の人間関係が等距離となり、また、人間関係構築の機会が限定されることで親しいクラスメートができにくい状況となった。そのため、対面授業では隣のクラスメートなどに容易に行うことができる簡単な質問がしにくくなるなど人間関係構築に関する点は課題として残った。

キーワード

中級日本語学習者、オンライン、相互作用、再話、
親しいクラスメートができにくい状況

1. はじめに

本稿は名古屋大学国際言語センターにおいて、2020年度春学期に実施したオンラインによる全学向け日本語プログラム SJ330聴解の実践報告である。SJ330は中級後半の日本語学習者を対象とした上級レベルへつなげるためのコースである。聴解クラスでは、大学・大学院においてやや専門的な内容を聴いて理解できること、また、聞いた内容について口頭での説明や文章としての要約、自身の経験などと結びつけて考えを述べられることなど、受容から産出につながる能力の育成を目的としている。2020年度春

学期は、COVID-19感染拡大の影響により、すべての授業がオンラインでの実施となった。この聴解授業において、教師と学習者、学習者間の相互作用がどのように行われたのかについて見ていきたい。

2. 実践概要

先述した通り、本実践はオンラインでの実施となった。教員が作成した資料の配布、課題の提出などについてはNUCT（名古屋大学のe-Learningシステム）を、授業内で行うディスカッションなどのやりとりの活動についてはオンラインの同時双方向会議ツールをそれぞれ用いた。また、テキストは東京外国語大学留学生日本語教育センター（2014）『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解 中上級』スリーエーネットワークを使用した。初回の授業までにテキストを用意するようにコース開始前に指示はしたものの、販売サイトでの売り切れ、配送の遅延などにより、間に合わない学習者もいた。そのため、初回はガイダンス及び聞くという活動への意識化を行い、2回目からテキストを用いての実施とした。2020年度春学期の授業参加者は、学部生、大学院への進学を予定する研究生、修士課程の学生、博士課程の学生、教員であった。

授業で聴解の音声を教員がオンライン上で流すことが著作権上、問題があるため、聞く活動については個人活動とした。およその流れは以下の通りである。

1. 前回授業での課題、疑問点などについての共有、質疑応答（全体活動）
2. 話題導入（全体活動）
3. 音声を聞き、内容に関する正誤問題に答える（個人活動）
→ 答えの確認、不明な部分についての話し合い（グループ活動）
4. 再度、音声を聞き内容についての設問に答える（個人活動）
→ 答えの確認、不明な部分についての話し合い・再話活動¹（グループ活動）

5. 要約（個人活動）→ピアレスポンス（グループ活動）→修正後、再提出
6. テーマについて、個人の経験や考えを踏まえての話し合い（グループ活動）

上記の1～6の活動は課によって多少の差はあったものの、90分授業1回半程度で実施した。基本的にはテキストに沿って進め、個人活動については授業内で一定の時間を設ける、課題とする、などの対応をとった。また、要約については提出されたものを教師が一つのデータとしてまとめ、NUCTにアップロードし、学習者間で共有した。同時に学習者間の話し合いで修正が困難であると判断した場合にはコメントもつけた。その後、各学習者が作成した要約の構成や表記、内容についてピアレスポンスを実施し、その際に教師からのコメントについても議論を行い、ピアレスポンス、議論での学習者同士のコメントなどを参考に修正したものを再提出することとした。

3. 学習における相互作用

教師と学習者、学習者間においてオンライン授業でどのように相互作用が行われたのか、筆者の授業記録と学習者の振り返りのコメントを参考に述べる。

3. 1. 教師と学習者

まず、教師と学習者の相互作用についてである。同時双方向会議ツールに慣れるのに多少の時間を要したが、他の授業も一律でオンラインで実施されたこともあり、第3回目を過ぎた頃からは、会議ツールでのターンの取り方なども徐々に慣れていった。続いて、音声を聞く活動であるが、本実践の最も大きな課題は、学習者がどのように音声を聞いているのかを教師が把握しづらい点であった。対面授業であれば聞きながら取るメモなどを容易に確認できるが、聞く活動は完全に個人活動としたため、確認が困

難になった。特に学習者の表情など非言語的要素についての情報が把握できなかったことから、不安などがある場合は教師への個別でのチャットなども促したが、うまく機能しなかった。メモなどについては Web 上で同時共有できるようなツールの活用も提案したが、聞くことに集中しにくいとの声があったため、こちらも断念した。

そこで、要約を行う前に、グループ活動として聞いた内容について原稿などを見ないで再生する再話活動を入れた。この活動により学生自身の理解が曖昧だった部分を明確にし、教師と学習者、学習者間での理解の支援につながるようにした。再話活動により、学習者間で理解の共同構築や修正が行われた。再生がうまくできない点などを学習者間で補うことで、自身と他者の理解状況を確認することができるようになった。また、教師としても学習者の理解状況を把握することができ、必要な支援を考えることができた。しかし、再話に時間がかかる点は課題であった。また、再話では理解の誤りについては表出された発話から判断できるものの、それ以外の部分についてはどのように聞いたのかを判断しにくいという課題が残った。また、学習者の振り返りシートに、教室で音声聞く時に比べ、丁寧に聞くことができたというコメントがあったが、1、2回聞き、おおよその内容を把握するという指示が適切に行われたかどうか、曖昧であった点もあった。

グループ活動はブレイクアウトセッションにて実施した。しかし、システム上、教師が同時に複数のグループに入ることができないため、各グループでどのような話し合いが行われているのか、進行に問題がないかななどの把握ができない部分も多かった。この点については、学習者の授業の振り返りのコメントで、教師が入らないことで話し合いの展開に不安が残ったという意見があった一方で、教師が入らないことで気兼ねなく話し合いができたといったコメントもあった。

3. 2. 学習者間

続いて、学習者間の相互作用について見ていきたい。まず、話し合い、

ピアレスポンス部分については基本ブレイクアウトセッションによるグループ活動で実施した。個人活動として音声を読み、わからなかった言葉や表現については、音声のどのような流れの中でのものであるかを説明した上で、自身の声で再生させ、グループ内で共有した。共有してもわからない場合には、音声の何分何秒の部分であるのかという音声の再生時間を共有し、グループのメンバーが各自で音声を読み、確認することで解決を図った。この点については対面授業に比べ、時間がかかってしまったものの、丁寧に聞くということは各学習者に強く意識化された。

次に要約についてである。聴解における要約作成の意義について、田代・中村・大木（2014）は、①学習者が話を聞くときに話の要点に注目する、②わからないことばについては、聞き取ってさまざまな方策を用いて意味を知ろうとする、③要約の文字制限が学習者にとって大きな負担となっているが、それが要点の取舍選択につながっている、という3点を指摘している。オンラインでの授業においても、上記の意義を損なうことなく実施ができた。特に再話活動を取り入れたことで、聞いた内容の整理が行われたことが、要約を行う際に有効に働いたようである。この他、②については、自身の聞き取りが曖昧で、メモしたことばを辞書などで調べても見つからなかった場合に、スマートフォンの音声認識機能を活用し、聞き取ったことばが正確であったかどうか、照らし合わせたという学習者もいた。音声認識機能の活用を推奨することが妥当かどうかは判断が難しい点もあるが、自身が使用できる学習ツールの可能性を広げるという点においては学習の意味は大きいのではないだろうか。

また、オンラインでのグループ活動は、教師が主催するオンライン上の場に人間関係を構築する機会が限られてしまったことから、学生間の人間関係が等距離となり、親しいクラスメートができにくい状況となった。対面授業の場合、何回か授業を進める中で授業前後のおしゃべりなどを通してよく話すクラスメートができるなど学習者間での人間関係が構築される。また、対面授業であれば隣のクラスメートに簡単に確認できる内容が、オンラインのグループ活動では、ターンをとって発言しなければならず、

質問しにくかったというコメントもあった。チャット機能などを活用するなど、学習者間などでのやりとりも促したが、活動外での人間関係が構築されていない状況では、さほど機能せず、課題として残った。

4. まとめと今後の課題

以上、SJ330聴解クラスにおける教師と学習者、学習者間の相互作用について述べてきた。オンラインでの実施の効果として、個人の速度で丁寧に聞きながら学習が進められる、オンラインツールの使用が容易になることが確認できた。また、課題としては、聞くプロセスの把握が困難であること、学習者間の人間関係の構築をいかにグループ活動の外へ敷衍させるかという2点となった。前者については再話活動を取り入れることで解消につなげることができたが、後者については授業内に人間関係構築ができるような余白の時間を設けるなど、今後、実践を行う中で改善を試み、検証していきたい。

注

- 1 卯城（編）（2009：119）は再話について、「ストーリーを読んだ後に原稿を見ない状態でその内容を知らない人に語る活動」とであるという。このように再生されたストーリーから学習者がどのようにテキストを理解しているのかを把握することができることから、日本語教育分野では読解において用いられている。ただ、藤田（2019）のように、中級レベルの聴解授業で再話を行い、それが聴解ストラテジーの育成、聴解力を高めるために有効であったとする研究もあり、聴解においても有用な活動であると考えられる。

参考文献

- 卯城祐司（編）（2009）『英語リーディングの科学「読めたつもり」の謎を解く』研究社
- 田代ひとみ・中村則子・大木理恵（2014）「アカデミック・ジャパニーズにおける要約作成の意義」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』40 pp.113-124

藤田裕子 (2019) 「聴解ストラテジーの育成を意図した授業の効果 :—再話と聴解ダイアリーの分析結果から—」『日本語教育方法研究会誌』25 (2) pp.132-133

